夢窓幼稚園通信第24号

2015年　6月　30日

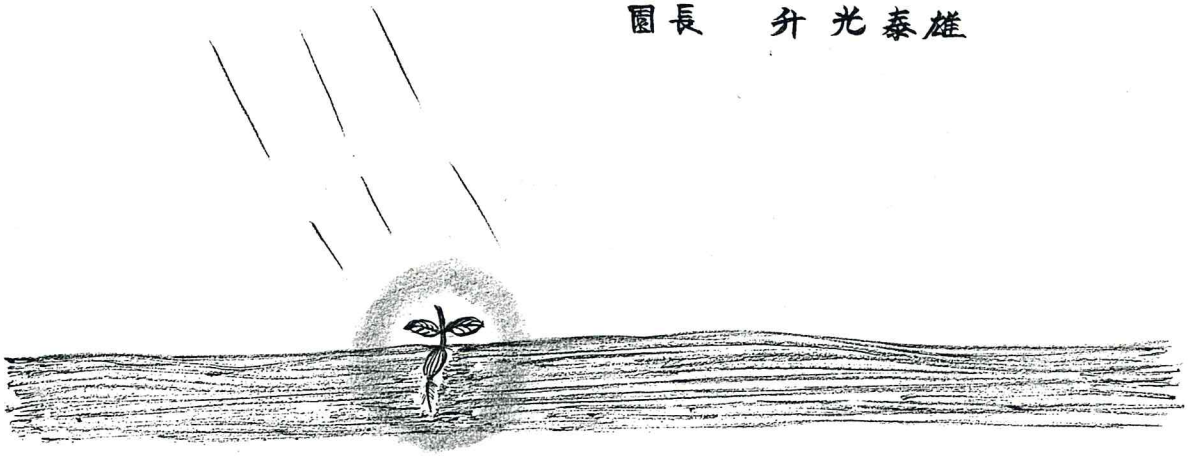
梅雨の合間の青い空・・・日曜日の昼下り、少し遅くなった昼ご飯を、ふと思いたって庭の風を感じながらいただこうと、渡り廊下に持って下りました。背中の方から前の方へと白い雲が流れていきます。
思っていたより風が時折強く吹き、低いところの雲は固りにならずに柔らかく溶けるようにして、速く遠くの方へ行ってしまいました。
昼ご飯に思いを戻し、ひじき蓮根やおでんの大根や人参、野菜の煮てみご飯・・・・を食べて顔を上げると、空の様子が数分前とはまったく違っていました。
空の表情もずいぶん変わるものだなあと、思いました。
雲は風の流れを見せてくれているのですね。風を見ていたら、音で涼を与えてくれる風鈴をそろそろ吊さないと！と思い出し、さっそくいくつか下げました。
優しい音が流れてきます。風鈴が風の流れを聴かせてくれます。

ゆったりした気分で庭をたのしんでいると、目の前の緑が鮮やかです。
おひさまから光が射し込みみどり葉たちが見事です。
おひさまの光がものたちに触れることによって、光が輝きあるすばらしく流れるものであることが分かります。もし宇宙の中で何かに触れなければ、何かに受けとめられなければ、闇と同じような状態でしかないのでしょうから・・・・。葉に受けとめられ、みどり色の輝きが生まれ、「光という流れ」を感じさせてくれるのでしょう。
光に毎日照らされ、キュウリが一人前の大きさになりました。
トマトも次々とふくらんでいきます。おいももスイカもつるを伸ばしています。
子どもたちも光の下で、どんどん大きくなっていきます。
光が降り注ぎ、いのちがゆたかになっていくのですね。
光の流れそのものの中に、いのちという時間が同時に流れているのかもしれません。
光を授げかけながら、時を共にしながら、おひさまはいのちたちひとつひとつと出会い、それぞれを見守り、色づかせ、何かを託してくれているのかもしれません。
おひさまの光に包まれて、たくさんの（象徴としての）種がこの地上に

与えられ、祝福されているような気がするのです。
大地と天空の間を生きるものは、おひさまの光に包まれた
いのちの種を内に宿して、わくわくしながら それが芽を出し
葉をひろげ 花を咲かせ 実を結ぶのを たのしみに生きている
ような感じがするのです。
そうでなかったら、幼な子からお年寄りまで 誰でもが おひさまの光を
好きであるはずはないと思います。

大地と大空との間を生きる …というのは、目に見えるものばかりでなくて、
私たちの心の中で想い浮かべることや 思い描くようなことも含まれて
いることでしょう。
私たちの心に何かアイデアが浮かんだり、難題を解く糸口が見えてきたり
すると、光が射し込んでくるのは、アイデアやヴィジョンが 光の流れにのって
心の中に届けられるからなのかもしれません。 思考といういのちが、光に
包まれて届けられているのでしょう。

私たちは、例えば風の流れを、そして いのちという光を受けとめる
ことができる一人ひとりなのです。
何という よろこびなのでしょうか。

7月がやってきます。
七夕に願いをかけ、なつまつりに胸を踊らせましょう！
光に輝く、たくさんの夢や たのしい思いつきや目標や意味の種が、
この冒険の季節に見つかるかもしれませんね。

（6月28日 日曜日 記）
園長　升光泰雄